

世界共時性という内容は不明瞭である。世界共時性といっても坂本義和のような相互浸透と平等化というものもあれば、松本健一のようなアジアナショナリズムの媒介というものもある。特殊日本(戦後民主主義)から世界共時性へ、といっても多様なのである。私の考えでは、世界共時性というのは一九三〇年代的な世界思想でなく、非戦後の戦後を媒介にした世界思想ということになる。世界共時性は思想的課題のうちにあられるし、そこにしかないのであり、それ以外は虚妄である。そして未完なのは戦後民主主義ではなく、この世界思想による本質的な革命である。

▽——△ 方法自体を疑うべき

中嶋嶺雄「『新しい冷戦』の国際学」(世界)は世界的な国家対立の根拠とされているものに検討を加えている。彼は現在の「冷戦」



矢野 暢氏



中嶋 嶺雄氏

と呼ばれるもの、五〇年代の東西冷戦とは異なるものだとしながら、その構造を分析する。一九八〇年代は一九三〇年代とともに現代史の曲り角になるのではないかと直観はともあれ、「八〇年代の危うさ」と難しさは、……いかなる国の政策決定者も、八〇

年代の不可測性とその流動性の大ききゆえに、もはやそのような確固とした歴史の教訓(三〇年代の諸経験)に依拠できない時代として八〇年代を感じているところにあるのではないかとという視点に流通している冷戦分析とは異なるところであり、興味をひいた。

▽——△ 矢野暢「戦略を失った超大国」

(中央公論)は副題の「心理国家」の理論ということが示すように、理性的な判断力を喪いつつある国家の状況を抽出している。心理とい、理性というが国家の本質が共同幻想にあることは少しも変わるものではない。唯、共同幻想の構成内容がいわゆる合理的国家として規範化しえないものを含んでいることが広範に登場しているにすぎない。本当は国家が理性的であるという当否や基準では把握しえない(国家)のあり方が前面化し、旧来の歴史的な国家理論ではつかまえられないということである。心理国家という概念は有効なチームにみえるが、文化相対主義と同様にあいまいである。超大国の戦略の喪失は国家思想の欠陥の結果であり、依然として、それをとらえる上で切実なのは本質的な国家思想や理論である。文化人類学的方法の導入である文化相対主義——心理国家はもったいないか。

政治的関心の変化

戦後という時代の性格をめぐる論議が世代論として出てくるとき、大なり、小なりふくんでいるのは学生の動向や自らの学生体験である。菅孝行「戦後学生史の断面」(流動)は最近の学生像の変貌を通して、時代の変貌を把握しようという試みである。七〇年代を通して最も変貌したものの指標の一つにとりあげられるのは学生の像の変容であり、学生の政治的関心の変化である。そこで注目されるのは学生や大学という概念はどの程度まで変ったのかということである。また学生の入政的関心への変化といわれるものは何を映しているのかということである。リーニンは学生でモヤンテリゲンチャのなかでもっとも時代に敏感(政治に敏感)に反応するものと指摘した。韓国、光州での学生のためにはそれを実証しているようにみえる。私もまた、このような学生像をもってきた。昔のいうように、白紙の時間、空白の時間を許容されている結果とはみないとしても、私は学生が普遍性に向っての倒錯をもっとも濃密に自然過程としていられるところ、にその根拠をみえた。韓国の学生、日本の学生との政治的関心のちがいが、時代的な政治関心をめぐる学生のちがいは彼らに映る(普遍性)なものちがいではないのか。(普遍性)とは歴史や理念としてまずあらわれるのだから、その現実をうつつしているといえるであらう。光州での鋭い学生の政治的反応と日本の学生の政治的無関心の深化を、(普遍性)の感懐として包括的にみる思想が問われているのではないか。(みかみ・おさむ氏—評論家)